

プラトンのイデア論の不完全述語解釈その後

——中畑⁽¹⁾とホワイト——

浅野幸治

一、プラトンのイデア論の不完全述語解釈

本研究ノートでは、まずプラトンのイデア論の不完全述語解釈を簡単に紹介し、その後の展開として中畑の解釈とホワイトの解釈を比較検討することを目的とする。プラトンのイデア論とは、F（なんらかの述語）だと言われる多くの個物とは別個にFそのもの（イデア）の存在を要請する理論的仮定である（『国家』篇476c2-d4、『パイドン』100a-b）。例えば、我々の周りには、多くの美しいもの、美しいリンゴ、美しい馬などが存在するけれども、イデア論は、これらの美しいものとは別に「美そのもの」と言われるものが存在することを要請する。ここで当然、イデア論が一体何かということを理解するためには、イデアの本性およびイデアと個物の関係が大きな問題になる。不完全述語解釈とは、そのような問題への糸口として、イデア論生成の契機をいわゆる「不完全述語（incomplete predicates）」の特徴に見いだす解釈である。「不完全述語」とは、主語について語られる時、適当な説明（限定）の補い方に依じて真になったり偽になったりするような述語のことである⁽²⁾。例えば、

「シミアスは大きい」

という文章は、「ソクラテスよりも」という説明を補って「シミアスはソクラテスよりも大きい」とすれば真になるし、「パイドンよりも」という説明を補って「シミアスはパイドンよりも大きい」とすれば偽になる。普通に「シミアスは大きい」と言われただけでは、真でも偽でもなく、その意味で「不完全」である。不完全述語の例としては、他にも「等しい」、「美しい」、「よい」などがある。このような述語は、完全述語と対比される。完全述語とは、何らかの説明を補うことなくし

て、それだけで既に真であったり偽であったりするような述語である。例えば、

「ソクラテスは人間である」

という文章は、それだけで真である。このような述語の例としては、他にも「火」、「水」、「指」などがある。

プラトン自身の説明によれば（『国家』篇523b9-c4）、例えば「大きい」と見えるものは同時にその反対（「小さい」）にも見えるが、「指」と見えるものはそういうことがない。もし「大きい」と見えたその同じものが同時に「小さい」とも見えるのであれば、そのものは「大きい」とも「小さい」とも同一視できないであろう。とすると、「大きい」とか「小さい」とかは目に見えることではなく、知性によって理解されるような種類のもの（イデア）であると、プラトンは主張している。この議論は、明らかにイデアの存在を主張するものであり、その議論が利用している「大きい」という述語は不完全述語である。では、不完全述語解釈は、イデア論をどう解釈するのか。

二、不完全述語解釈の狙い——批判的な解釈の場合

個物とイデアの違いについて、プラトンは、目に見えるFは、Fであったり非Fであったりするのに対し、Fのイデアは純粋にFであると言う（『饗宴』211e1、『国家』篇478e1-3）。何故、目に見えるFはFであったり非Fであったりするのかが。オーエンは、プラトンに批判的な不完全述語解釈を取っている解釈者であるが、不完全述語と完全述語との対比を、関係を表す言葉（関係語）と自体的な述語（1項述語）との対比と見る。つまり、不完全述語が不完全であり、適当な説明の補い方に依じてFと現れたり非Fと現れたりするのは、いわゆる不完全述語が関係を表すからに過ぎない。オーエンによれば、プラトンは、自体的な述語の場合になぞらえて、関係語にも関係語が自体的に当てはまる特別な対象（イデア）の存在を要請したのであり、それは、プラトンが関係語の本性を理解しなかったことを示し

ている⁽³⁾。

例をあげて説明すれば、「等しい（大きさである）」という述語は、木材やその他の個物について言われる時、不完全である。何故ならば、木材でもその他の個物の場合でも、たとえあるものと較べれば等しくても別のものと較べれば等しくないからである。従って、個物はその性質が曖昧であり「等しい」ということの規範たり得ない。もし我々が「等しい」という言葉を使う時無意味なことを言っているのではないとしたら、等しいことそのこと（等のアイデア）、即ち「等しい」という述語が上のような曖昧さなしに当てはまる対象が個物とは別に存在しなければならない（とプラトンは考える）。しかし、オーエンによれば、「等しい」という述語は関係語であり、「等しい」と呼ばれるものは常に何かと等しいのであって、「等しい」という述語が他との比較なしで自体的に当てはまる対象、即ち等しいけれども他の何と等しいわけでもないような対象を想定するのは、「等しい」という述語の本性からして不可能な企てなのである。

三、不完全述語解釈の狙い——好意的な解釈の場合

上のオーエンの解釈は、アイデアの自己述定という考え方、つまりFのアイデアはそれ自身Fであるという考えを前提している。その故に、例えば、等しさのアイデアは、他の如何なるものとの関係もなしにそれ自身で「等しい」とされる。確かにプラトンは、FのアイデアはFであると考え、例えば、

「正義のアイデアは正義である」（『プロタゴラス』330c8-9）

と言っている。しかし、プラトンに好意的な解釈を取るアレンは、アイデアの自己述定という考え方を否定し、「FのアイデアはFである」というタイプの文章において「Fである」という表現は述語的用法で用いられているのではなく、「FのアイデアはFである」という文章はむしろ「Fのアイデア」と「F」の同一性を述べていると主張する⁽⁴⁾。アレンによれば、Fのアイデアが「Fである」と呼ばれる場合と多くの

Fが「Fである」と呼ばれる場合とでは「Fである」という表現の意味は同じではない。度量衡の単位を定義する原器、例えばかつてパリにあったメートル原器が「1メートルである」と言われる場合とその原器によって計られるものが「1メートルである」と言われる場合とで「1メートルである」ということの意味が同じではない、即ち、メートル原器について言われる場合には「メートル原器が1メートルである」と1メートルを同定するのに対し、木材について言われる場合にはその木材が「メートル原器と同じ大きさである」という関係を表している。丁度そのように、アイデアと個物が同じように「Fである」と呼ばれる時にも「Fである」ということの意味は同じではなく、アイデアについて言われる場合には「FのアイデアがFである」とFそのものを同定するのに対し、個物について言われる場合には「Fのアイデアの似像である」という関係を表す⁽⁵⁾。

従って、アレンによれば、例えば「等のアイデアは等しい」という文章は、「等しい」という関係語を等しいとされる相手なしに等のアイデアに当てはめようとするものではない。つまり、「等のアイデアは、何とも等しくないような仕方で等しい（等しいが何とも等しくない）」と主張しているのではない。そうではなく、「等のアイデアこそ等しさそのものである」と言っているに過ぎない。こうして、アレンは、関係語を自体語として扱っているというオーエン流のプラトン批判をかわす。では、アレン自身は、どういう不完全述語解釈を取るのか。

アレンによれば、不完全述語と完全述語との区別は、まさにその区別の目的のために、即ち、完全述語のアイデアは措定せずに不完全述語のアイデアを措定するために導入されている。不完全述語は比較語または関係語であり、プラトンは、少なくとも中期対話篇では、比較語または関係語のアイデアを措定するが、実体を表す名詞に対応するアイデアは措定しないのである⁽⁶⁾。

四、中畑の解釈

中畑もそれから次に論じるホワイトも共に、アイデアの範囲は不完全述語に限定されない⁽⁷⁾。中畑によれば、不完全なのは述語ではなく、「シミアスは大きい」という文章を「シミアスはソクラテスよりも大きい」という文章に変えても、その文章の指し示す現れが完全になるわけではない⁽⁸⁾。というのも、プラトンが利用している主要な対比は、不完全述語と完全述語の対比というよりも多くのFとFそのものとの対比だからであり、原理的にこのFが不完全述語に限定される理由はないからである。個物がFと見えたり非Fと見えたりすることから、現れの特徴について中畑は、「何かが現れるのは特定の人に対してであり、現れはその知覚者とのかわりにおいて成立する。すなわち、現れは、知覚者の一定のパースペクティブの下にあることを含意する。」と書いている⁽⁹⁾。（ここでは中畑は『パイドン』について論じているので知覚ということで五感による感覚だけを意味しているが、同様のことは、五感に限定されない広い意味での知覚についても言えるであろう⁽¹⁰⁾。）つまり、現れはつねに「誰それにとって」という限定を受ける。

しかし、だからといって現れが単に主観的だということではない⁽¹¹⁾。例えば、薬指は、小指と較べる人にとっては大きく、中指と較べる人にとっては小さいと現れるが、これらの現れは、特定の知覚者に依存するわけではなく、小指と較べた場合には誰が見ても⁽¹²⁾薬指は大きく、また中指と較べた場合には誰が見ても薬指は小さく現れるからである。従って、相反する現れは、知覚の対象について、特定のパースペクティブから客観的な⁽¹³⁾事柄を述べている。しかしながら、つねに特定のパースペクティブから現れるということが現われのアイデアとの（1つの）大きな違いであり、アイデアはそういったパースペクティブを持たないとされる⁽¹⁴⁾。

五、ホワイトの解釈

多くのFとFそのものとの違いが、中畑の言うように特定のパースペクティブのあるなしによって説明されるにしても、何故アイデアはそういったパースペクティブ

を持たないのか。オーエンは、プラトンの不完全述語の多くが「隠れ比較級 (concealed comparatives)」であると言い⁽¹⁵⁾、不完全述語が関係語であると解釈した。例えば、「大きい」の意味は実のところ「～よりも大きい」というわけである。しかし、ホワイトは、まさにこれを否定し、プラトンが比較級よりも原級を使っている点を重視する。

ホワイトは、自分の解釈を説明する例として、プラトン自身も使っている（『国家』篇523e6）「かたい」という述語を使う。ホワイトによれば、例えばフランスパンは、かたいと思われる時もあるしやわらかいと思われる時もあるが、我々がフランスパンはかたいと思う場合に我々が意味していることは端的に「フランスパンはかたい」ということであって「フランスパンは（例えば）ドーナツよりもかたい」ということではない⁽¹⁶⁾。もちろん、我々は「フランスパンはドーナツよりもかたい」と思うこともあるが、この判断は「フランスパンはかたい」という判断とは別個の判断であり、「かたい」という原級の意味は「～よりもかたい」という比較級には還元され得ない⁽¹⁷⁾。さらに述語が名詞の場合の例として、ホワイトは「三角形である (a triangle)」をあげている⁽¹⁸⁾。例えば、我々がこの木材は三角形であると思うとしよう。確かにその木材は昨日は三角形ではなかったかもしれないし明日は三角形ではないかもしれない。しかし、我々がこの木材は三角形であると思う時に我々が意味しているのは端的に「この木材は三角形である」ということであり、それは「この木材は今三角形である」という判断とは異なり、「今」とかその他の時間の観念は判断の意味内容の中には入っていない。

では、「フランスパンはかたい」という内容の判断は、真なのかそれとも偽なのか。ホワイトは、真とか偽とかいう言い方を避けて「許容可能性 (acceptability)」という考えを使って、判断が許容できるか否かはその判断がなされた状況、判断のパースペクティブに相対的であると主張する⁽¹⁹⁾。例えば、鋼鉄に触れたすぐ後では「フランスパンはかたい」と判断することは許容できないが、羽毛ジャケットに触れたすぐ後ではそう判断することは許容できる。但し、あくまでも注意

すべき点は、いずれの場合も判断の内容は同じ、「かたい」という述語の意味は同じだという点である。

こうして、ホワイトは、プラトンが問題にしている述語は関係語ではなく「客観的 (objective)」観念を表す1項述語であると解釈する⁽²⁰⁾。この解釈の背後には、我々が知覚的对象についてFという判断ができるのは、我々が既に何らかの仕方Fのアイデアを把握しているからであるという考えがあると思われる⁽²¹⁾。例えば我々が「このフランスパンはかたい」と判断する時、我々は単にこの特定の感覚を感じているだけではなく既に「かたいというそのこと (かたさのアイデア)」を考えている、そしてこのかたさのアイデアの把握こそが「かたい」という述語をこのフランスパンに適用することを可能ならしめている、というわけである。しかし、「かたい」という述語は客観的観念を表し、本来的にはアイデアにのみ当てはまる⁽²²⁾。他方、時間空間の中にあつて常に一定のパースペクティブからのみ理解される知覚の対象には本来的には当てはまらない⁽²³⁾。にも拘わらず、我々は通常、単に羽毛ジャケットよりかたいに過ぎないこのフランスパンについて、それがあたかもアイデアであるかのように「かたい」と言い、今日三角形であるに過ぎないものについて、端的に「三角形である」と言い、単に自分の利益に過ぎない事柄についてあたかも客観的に善であるかのように端的に「よい」と言っているのである。

六、中畑の解釈とホワイトの解釈の比較

中畑もホワイトも従来の不完全述語解釈を退け、不完全述語の特徴とされるFであり非Fでもあるということが現象の世界をアイデアの世界から区別する特徴であると、つまり現象の世界にパースペクティブなしで当てはまるような述語は1つもないと考える。アイデアがパースペクティブを持たないのは、ホワイトによれば、アイデアがパースペクティブなしの客観的な観念を表すからである。中畑も、アイデアがパースペクティブを持たないという点についてはホワイトに同意する。しかし、中

畑は、『パイドン』74b7-c6を論じて次のように述べている。

等しいという現われの内容はすでに何かとの関係を含意している。この場合知覚内容自身が関係的なものなのである。——プラトンが「等しい」をここで範例に用いたのは、むしろ（知覚的）現われにおいては「等しい」という内容そのものがすでに特定のパースペクティブの存在を示していること、特定のパースペクティブに拘束されたものであることを明示的に示すことにあったのではないか。(24)

ホワイトが判断の内容が客観的であること、パースペクティブを含まないことを強調するのに対して、中畑は、「等しい」という知覚の内容にはパースペクティブが含まれていると主張する(25)。中畑のこの主張は『パイドン』の「等しい」の例に限られる必要はないであろうから、中畑の主張は、Fのアイデアはパースペクティブを持たないが知覚に現われたFにはパースペクティブが含まれているというFのアイデアと知覚に現われたFとの区別になる。

それでは、我々の知覚的判断にはどれだけパースペクティブが含まれているのか。あるいは(26)、我々は通常の知覚的判断においてどれだけパースペクティブを意識しているのか。それは、述語によってまちまちであるかもしれない。ホワイトも、我々が時にパースペクティブに相対化された判断、例えば「シミアスはソクラテスより大きい」という判断を行うことを否定するものではない。しかし、確かに我々は時にはパースペクティブに相対化されない判断、例えば「日の出は美しい」とか「自動車はよい」とかいった判断も行う。こういった判断を行う時、我々は「美しい」とか「よい」とかいった述語で一体何を理解しているのだろうか。ホワイトの言うように、パースペクティブを持たない客観的な観念、「端的に美しい」とか「端的によい」ということだろうか。それとも、そういった客観的な観念は我々にとって理解不可能であって、中畑の言うように、我々の理解は「～よりも美しい」とか「～にとってよい」とかいった内容に限定されているのだろうか。パースペクティブを持たない客観的な観念が理解可能なものであるかどうかというこの

問題は(27)、単に解釈上の問題であるだけではなしに、アイデア論そのものの理解可能性に関わる問題である。

七、批判的コメント

ホワイトは、自らの解釈をオーエン、ブラストス(28)、ネハマス(29)によって展開された不完全述語解釈を継承するものと見る(30)。ホワイト等の不完全述語解釈の意味は、感覚世界の不完全性についてのより伝統的な解釈(それをネハマスに倣って「近似説」(31)と呼ぶ)と対照することによって一層明らかになる。近似説とは、感覚される個々のFの不完全性について、Fのアイデアが正確にFであるのに対して個々のFはFの定義をせいぜい近似的に具現しているに過ぎないとする見方である。例えば、直線のアイデアは正確にまっすぐであるけれども紙に書かれた直線はよく見ればどこか曲がっていたりでこぼこがあったりする。従って近似説によれば、感覚対象によって具現されたF(例えば白色)は実は完全なF(純白)ではなく不完全なF(白っぽい灰色)に過ぎない。これに対して、不完全述語解釈は、個々のFがFであることには問題を見いださず、個々のFは完全なFを不完全な仕方具現すると、即ち同時に非Fでもあるという仕方具現すると考える。近似説が個々のFがFの定義を正確には満たさないとするのに対して、不完全述語解釈は、個々のFがFのアイデアと同様にFの定義を満たすと考える。例えば、特定の個人であっても現に美しい人は現に美しい。こうして不完全述語解釈は、個々のFとFのアイデアとの間で「F」の一義性を確保しようとする(32)。

ホワイトの解釈には、二世界説批判を回避しようとする意図があると思われる。プラトンのアイデア論は個物とは別個にアイデアがあることを主張するので、そこから個物の世界とアイデアの世界が別々の世界であるという結論を導くことは容易である。二世界説批判とは、もし一方に個物の世界があり他方にアイデアの世界があり、個物についての認識が思わくでありアイデアについての認識が知識であれば(『国

家』篇478a6-479e9)、知識は個物の世界に住む我々には何の関係もない、従ってアイデアも我々には何の関係もなくアイデアを措定することに何の意味もないという主旨のアイデア論批判である⁽³³⁾。これに対して、ホワイトの解釈は、我々の知覚的判断(思わく)の内にアイデアが既に不可欠の要素としてあるとすることによって、言わばアイデアをアイデアの世界から我々の世界に引きずりおろしアイデアの我々にとっての意味を回復しようとする。これは非常に興味深い解釈であるが、その試みが成功しているか否かは別問題である。この問題へ行く前に、振り返って中畑の解釈に触れておく。

中畑の解釈によれば、我々の知覚的判断の内容にはアイデアは入ってきていない。丁度知覚的判断の対象がパースペクティブの下にあるように(例えば、シミアスはソクラテスよりも大きいという事態)、知覚対象を認識した知覚的判断の内容もパースペクティブの下にある(「シミアスはソクラテスよりも大きい」という判断)⁽³⁴⁾。しかし、もし我々の知覚的判断の内容には常にパースペクティブが含まれ、我々の知覚的判断が「～と比べてF」とか「～にとってF」ということを内容とするのであれば、中畑の解釈は二世界説批判をどう避けるのかが明らかでないであろう⁽³⁵⁾。一方で「～と比べてF」とか「～にとってF」ということを内容とする我々の知覚的判断(思わく)は知覚対象に関わり、他方で「端的にF」という認識(知識)はアイデアを対象とするのであれば、我々の世界の事柄とアイデアの世界の事柄は別個の世界の事柄と思われるし、そうするとアイデアが如何にして我々に現れるのかが明らかでないからである⁽³⁶⁾。

この困難をホワイトは、アイデアを対象とする「端的にF」という認識が既に我々の知覚的判断の中に入っているとすることによって解決する。我々の認識活動は言わばアイデアの世界と個物の世界の間であって両方の世界に足を突っ込んでおり、本来アイデアを対象とする「端的にF」という述語によって我々は常にパースペクティブの下にある知覚対象を認識するというわけである。このように、ホワイトは「シミアスは大きい」という判断を説明する。しかし、我々は「端的にF」という

客観的な観念を本当に理解しているのでしょうか。確かに我々は、個物のことを「端的にF」だと思えるかもしれないが、ホワイトの説明によれば、結局のところそれはパースペクティブなしの述語をパースペクティブの下にある対象に適用する誤用であり我々の勘違いに過ぎないであろう。そして、我々が「端的にF」だと思ったものがその都度実は「～にとってF」に過ぎないことが解るのであれば、我々は本当には「端的にF」ということを理解していなかったのであり、Fという判断の基礎にあるとされる我々の理解は「端的なF」の理解ではなく「～にとってのF」の理解に過ぎなかったのであろう。例えば我々が「端的によい」と思った事柄が実は「自分にとってよい」というに過ぎなかったのであれば、「よい」ということの我々の理解は結局のところ「端的によい」ということの意味ではなく「自分にとってよい」ということの意味に過ぎなかったのであろう。もしそうであれば、我々の判断の内容には「端的にF」ということは把握されていなかったということになる。これをプラトニックに言えば、Fのアイデアを認識していれば、個々のFをFのアイデアと間違ったりはしないのである（『国家』篇476c9-d3）。こうして、確かにホワイトの解釈はアイデアを我々の世界に引きずりおろしてくれるように思われたけれども、結局我々はパースペクティブの下にある世界（思わくの世界）に引きずり戻されるように思われる。従って、ホワイトの試みも成功しているとは言い難いのではないだろうか。

以上で中畑の解釈とホワイトの解釈に対して非常に簡単に批判めいたことを書いたが、最後に私自身の見解、少なくとも解釈の見通しも述べておくべきであろう。私は、近似説およびそれと関連した「存在の階層」という考え方がアイデア論の正しい理解ではないかと思う⁽³⁷⁾。確かに近似説に対する不完全述語解釈の側からの批判は、個々のFがFの定義を満たさないのであればFではない、というものであった。例えば、我々が文房具屋で買うことのできる30センチのものさしがよく調べてみると29.9センチにしか過ぎなかったのであれば、それは30センチのものさしではなく29.9センチのものさしだ、という批判である。しかし、プラトンの

イデア論を正しく理解するためには、単に物事が現にどうあるかを見るだけではなく、どうあろうとしているか（『パイドン』75a）をも考慮に入れる必要があると思う。確かに文房具屋で買った30センチのものさしは現実には29.9センチに過ぎないかもしれないけれども、それが30センチに等しくあろうとしている（そう意図されている）限りにおいて依然として30センチのものさしと呼ぶことができるのではないかと思う。そして人間の場合も同様で、単に我々が現に何を認識しているかだけではなく、我々が何を愛しているか（『国家』篇479e10-480a13）、そして我々の魂がどちらの方向に向かっているか（『国家』篇518c4-d8）ということが重要であろうと思う。

参考文献

- 浅野幸治、「哲学者と思わく愛好者——プラトン『国家』篇第5巻474c-480a」
『東北哲学会年報』第10号（1994年）、15～27頁
- 、「Degrees of Reality in Plato: Part I」神戸大学哲学懇話会『愛知』第10号（1993年）、(1)～(14)頁
- 、「Degrees of Reality in Plato: Part II」阪南大学『阪南論集 人文・自然科学編』第30巻（1994年）第2号、17～34頁
- 中畑正志、「相反する現われ——イデア論生成へのプラトンの1視点」、『プラトンの探究』（81～100頁）に所収
- 森俊洋・中畑正志編、『プラトンの探究』、九州大学出版会、1993年
- Allen, R. E. "Participation and Predication in Plato's Middle Dialogues." *Philosophical Review* 69 (1960), pp. 147-64. Reprinted in Allen, *Studies*, pp. 43-60 and in Vlastos, *Plato I*, pp. 167-83 (cited in the last pagination).
- . "The Argument from Opposites in *Republic V*." *Review of Metaphysics* 15(1961), pp. 325-35. Reprinted in Anton and Kustas, pp. 165-75 (cited in the latter pagination).
- , ed. *Studies in Plato's Metaphysics*. London: Routledge and Kegan Paul, 1965.
- Anton, J. P. and Kustas, G. L., eds. *Essays in Ancient Greek Philosophy*. Albany: State University of New York, 1972.
- Bambrough, Renford, ed. *New Essays on Plato and Aristotle*. London: Routledge & Kegan Paul, 1965.

- Kraut, Richard, ed. *The Cambridge Companion to Plato*. Cambridge: Cambridge University Press, 1992.
- Nehamas, Alexander. "Plato on the Imperfection of the Sensible World." *American Philosophical Quarterly* 12 (1975), pp. 105-17.
- Owen, G. E. L. "A Proof in the *Peri Ideōn*." *Journal of Hellenic Studies* 77 (1957), pp. 103-11. Reprinted in Allen, *Studies*, pp. 293-312, and Owen, *Logic, Science and Dialectic*, pp. 165-79 (cited in the last pagination).
- . *Logic, Science and Dialectic*. Ithaca: Cornell University Press, 1986.
- Penner, T. and Kraut, R., eds. *Nature, Knowledge, and Virtue: Essays in Memory of Joan Kung (Apeiron 22)*. Edmonton, Alberta: Academic Printing and Publishing, 1989.
- Vlastos, Gregory. "Degrees of Reality in Plato." In Bambrough, pp. 1-19. Reprinted in his *Platonic Studies*, pp. 58-75.
- , ed. *Plato I: A Collection of Critical Essays*. Garden City, NY: Anchor Books, Doubleday, 1971.
- . *Platonic Studies*. 2d ed. Princeton: Princeton University Press, 1981.
- White, Nicholas P. *Plato on Knowledge and Reality*. Indianapolis: Hackett, 1976.
- . *A Companion to Plato's Republic*. Indianapolis: Hackett, 1979.
- . "The Rulers' Choice." *Archiv für Geschichte der Philosophie* 68 (1986), pp. 22-46.
- . "Forms and Sensibles." *Philosophical Topics* 15 (1987), pp. 197-214.
- . "Perceptual and Objective Properties in Plato." In Penner and Kraut, pp. 45-65.
- . "Plato's Metaphysical Epistemology." In Kraut, pp. 277-310.

注

- (1) 本研究ノートで論述する中畑とはもつばら氏の論文「相反する現われ」に限定されていることを予め断っておく。
- (2) Owen, "A Proof in the *Peri Ideōn*," p. 174.
- (3) Owen, "A Proof in the *Peri Ideōn*," pp. 177-178.
- (4) Allen, "The Argument from Opposites," pp. 170-171, especially p. 174, n. 11.
- (5) Allen, "Participation and Predication," pp. 170-171.
- (6) Allen, "The Argument from Opposites," pp. 168.
- (7) 中畑、「相反する現われ」、八四～八五頁、White, "Perceptual and Objective Properties," pp. 57-8.

- (8) 中畑、「相反する現われ」、九三頁。
- (9) 中畑、「相反する現われ」、九二頁。
- (10) この広い意味での知覚は、ギリシア語でドクサと言われるものであり、実質的には判断というに等しい。広い意味での知覚には、プラトンの場合典型的に「美しい」、「よい」、「正しい」などを感じとる能力が含まれる。但し、判断の対象（主語）は、狭い意味での知覚（五感）の対象、プラトンが「目に見えるもの」と呼ぶものに限定されるように思われる。
- (11) 中畑、「相反する現われ」、九一～九二頁。
- (12) 「誰が見ても」は私自身の言葉であり、現われが単に主観的ではないことを中畑がこういう仕方でも説明するわけではないことを断っておく。次注を参照。
- (13) 「客観的な」も私自身の言葉であり、中畑がこういう説明の仕方をするわけではない。現実には、特定の知覚的性状は、特定の状況の中で特定の心理的・身体的条件の個人、例えばテアイテスに対して現れる。しかし、テアイテスでなく他の「誰であっても」もし同じ特定の心理的・身体的条件の下で同じ特定の状況の中に置かれたら同じ特定の知覚的性状を知覚したであろうという意味において、テアイテスが知覚した性状は「客観的」であると、私は思う。但し、偽なる判断の問題は、別に考察を要する。
- (14) 現われにはパースペクティブがあるのに対しイデアにはパースペクティブがないとされるが、イデアと現われのこの違いは、イデアに対する現われの優越性を示すであろうか、それともイデアに対する現われの劣等性を示すであろうか、それとも優越性とか劣等性とかに関しては中立的に単にイデアと現われとの非同一性を示すのであろうか。私は、（少なくとも1つの）劣等性を示していると思う。しかし、中畑は（中畑の論文はもっぱら『パイドン』74b-cについて論じており）、『パイドン』74b-cでの議論はイデアと現われの非同一性を示すのでありイデアと現われの関係の問題はその後の議論（74d-75d）で論じられると考える。
- (15) Owen, "A Proof in the *Peri Ideōn*," p. 174.
- (16) White, "Perceptual and Objective Properties," p. 48.
- (17) White, "Perceptual and Objective Properties," pp. 49-51, 59. もし原級と比較級の意味に密接な関係があるとすれば、原級が比較級によって説明されるというよりもむしろ比較級が原級によって説明されるという方向であろう、とホワイトは述べている ("Plato's Metaphysical Epistemology," p. 302)。
- (18) White, "Perceptual and Objective Properties," p. 57, and "Plato's Metaphysical Epistemology," p. 289.
- (19) White, "Perceptual and Objective Properties," p. 51.
- (20) White, "Perceptual and Objective Properties," pp. 60-61. ホワイトは、述語の客観的観念とパースペクティブの関係を説明して、指示代名詞と文脈との関係に似ていると言う ("Plato's Metaphysical Epistemology," p. 306, n. 16)。例えば「今日は天気がよい」という文は、いつどこで言われるかによって真であったり偽

であったりするであろうが、いつどこで誰によって言われようとも意味は同じであり、つまり「今日は天気がよい」という意味であって、例えば「一九九五年二月二十七日に神戸は天気がよい」という意味では決してないであろう。

- (21) 「感覚的对象について何らかの判断をする人は、言葉で表現できると否とに拘わらず、何らかの仕方でアイデアを把握しているのであり、このアイデア把握の本性が正確に何であるにせよ、このアイデア把握の故にこそ判断をするということがそもそも可能になっている。」 (White, *Plato on Knowledge and Reality*, p. 76)、「ある述語を感覚対象に適用して使う能力は、アイデアに適用された場合のその述語の理解に依存している。」 (White, "The Rulers' Choice." p. 44)
- (22) White, *Plato on Knowledge and Reality*, p. 74. 但し、ホワイトは、アイデアの自己述定ということに関してはかなり否定的である ("Perceptual and Objective Properties," p. 62, and "Plato's Metaphysical Epistemology," p. 301)。ホワイトは、「(Fのアイデア)とは、視点や状況から独立な「Fである」という観念であり性質であり——視点や状況とは関係なしにFであること (what it is to be F) である」 ("Plato's Metaphysical Epistemology," p. 301) と言っているので、むしろアレンの立場に近いように思われる。
- (23) White, *Plato on Knowledge and Reality*, pp. 73-4, "Forms and Sensibles," p. 211, "Perceptual and Objective Properties," p. 61, and "Plato's Metaphysical Epistemology," p. 300.
- (24) 中畑、「相反する現われ」、九八～九九頁、注22。
- (25) ホワイトも、「等しい」という述語が「兄弟である」という述語と同様に関係語であり、従って比較対象(何と等しいか)が述語の意味内容に入ってくることを認める。但し、ホワイトは、それ以外のパースペクティブ(例えば、どの方向から見たら等しいか)は述語の意味内容の中に入ってきていないと主張する ("Plato's Metaphysical Epistemology," p. 294)。
- (26) この「あるいは」という言葉は意図的に「即ち」という意味と「または」という意味の間で曖昧にしてある。というのは、ホワイトは「知覚的判断にパースペクティブが含まれているか」という問いと「知覚的判断においてパースペクティブを意識しているか」という問いを同一視しているように思われるが、中畑は同一視しないように思われ、私自身はよく解らないからである。なお、「どれだけ」というのは、パースペクティブを構成している諸条件(比較対象、光、知覚方向、知覚者の関心など)の内のどれどれが知覚的判断に含まれるかということである。
- (27) ホワイト自身、この点がアイデア論の問題点であると認めている ("Perceptual and Objective Properties," p. 61)。
- (28) Vlastos, "Degrees of Reality."
- (29) Nehamas, "Plato on the Imperfection."
- (30) White, "Plato's Metaphysical Epistemology," p. 305, note 8. この点でアレンは例外的である。不完全述語解釈に対する中畑の態度は、私には明瞭ではない。中畑

は論文「相反する現われ」始めの部分で次のように述べて不完全述語解釈の紹介を始める。

一九六九年という日付をもつ松永のこの発言は、（その当時まだかなり支配的であったと思われる）「存在の階層」あるいは「二世界説」という固定的なイデア論の像を拒否し、イデア論へのよりの確なアプローチの途を示した。——この「相反する現われ」という事態にイデア論導入へのプラトンの主要な動機を求めることは、すでに多くのプラトン研究者たちに浸透している。いわゆる「完全述語」と「不完全述語」の区別に基づく解釈〔不完全述語解釈〕は、このスタンスを、一つの明確な形へと整備、述語化したものと言えるであろう。

ここで中畑は、不完全述語解釈を、相反する現われに注目するというスタンスを中畑自身と共有しているよい解釈として紹介しているように思われる。しかし後で中畑は不完全述語解釈を批判するので、（中畑から見て）不完全述語解釈はよい所と悪い所とがあるということになりそうである。

- (31) Nehamas, "Plato on the Imperfection," p. 107.
- (32) この点でアレンと中畑は例外的である。中畑は、相反する現われの問題と個物の不完全性の問題とを区別して考える。
- (33) プラトン、『パルメニデス』133b4-134e8を参照。
- (34) 但し、中畑自身の言葉では、知覚的判断の内容と対象とは区別されていない。中畑の言う「知覚されるもの（事態）のあり方」が知覚的判断の対象に近いようにも思われるが、中畑は、「現われ」という言葉で知覚的判断の内容と対象の両方を含めているように思われる。中畑、「相反する現われ」、九二～九三頁を参照。
- (35) 単に論文「相反する現われ」では説明されていないという意味において。
- (36) 確かに、中畑は、「事態が f がこの現われを「越える」存在 (Φ) に何らかの仕方がかかわり、むしろその存在こそが何かを f として了解しうる根拠としてわれわれに先行的に理解されている」と書いている。例えば「シミアスはソクラテスよりも大きい」と判断できる前に我々は最大のイデアを「理解」しているとされる。しかし、この理解はどのようなパースペクティブからの理解であろうか。（もしこれがパースペクティブなしの理解であれば、どうして我々は端的に「シミアスは大きい」という内容の判断をできないのであろうか。）
- (37) 「存在の階層」ということに関して、私は以前『国家』篇第五卷末尾の議論における思わくの対象としての「ありかつあらぬ」ものという概念の擁護を試みたことがある（拙稿「Degrees of Reality in Plato: I & II」またはその一部である「哲学者と思わく愛好者」を参照）。

〈付記〉

九州大学の中畑正志助教授には本研究ノートの初期草稿に目を通して頂き、特に「中畑の解釈」の部分について有益な助言を頂いた。この場を借りて感謝の意を記したい。言うまでもなく、本研究ノート中に何らかの間違ひがあれば、それはすべて私自身の責任である。

(一九九五年四月十日受理)

(付記 本研究ノートは、阪南大学『阪南論集 人文・自然科学編』第31巻第1号(1995年6月)、一～十一頁で発表したものである。)